

Preliminary Study of the Support System from Senior Students to Freshmen at the Kanazawa Seiryō University

NAGAI Akiyuki[†]

Abstract

Many universities offer support for freshmen of the transition from high school to university in April. In this type of support, senior students may take a role in assisting the new students. Previous studies have discussed the significance of the support from students. However, the transition support in April has been practiced empirically, and there has been little accumulation of research. Therefore, this study explores the support for freshman at Kanazawa Seiryō University. Two students who were engaged in the support participated in interviews for this study. The interviews revealed the support students' motivation and reflections. The results of the interviews suggested that the support students rated positively their experience of receiving support when they were new students, and that they wanted to support the next new students. Because of this motivation, they tend to refer to the content and success or failure of their own support with reference to the support they received when they were freshman.

Keywords

peer support, student support, freshmen support, freshmen seminar

金沢星稜大学における 在学生から新入生へのサポート体制についての探索的検討

永井 暁行[†]

キーワード

ピアサポート, 学生支援, 新入生支援, 新入生研修

1. 問題・目的

各人の生活環境が大きく変わるタイミングについて, これまで「環境移行」という視点から

研究が蓄積されてきた。その研究領域は広く, 学校から職場 (Dolton, Makepeace, & Treble, 1994; Ryan, 2001), 病院への入退院 (松森,

[†] a-nagai@seiryō-u.ac.jp (Liberal Arts and Sciences, Kanazawa Seiryō University)

2002), 障害者のグループホーム・ケアホームへの入所(藤井・江・西出, 2013), ターミナルケア(巖・石井・長澤, 2002)など多様な場面で議論されている。

環境移行のうち, 学校段階が変わり上級の学校環境に移ること(学校移行)は, 新しい学校に適応できるかという観点と合わせて検討されることが多い。たとえば, 小学校から中学校への移行の際には中学校生活への不安が強い生徒は新しい中学生活に適応しにくいことが示唆されている(南・浅川・秋光・西村, 2011)。

いずれの学校段階への移行も, 移行に直面する本人にとっては危機的な状況になり得る。大学も例外ではない。高校から大学への移行においては学業文化の差(神藤・石村, 1999)などによってとまどいやストレスが生じることが指摘されており, 新入生は精神衛生上の問題を抱えやすい(須崎・杉山・斉藤, 2017)。また, 大学での学業に対するイメージ・期待と現実のズレに違和感を抱くことが議論されてきた(半澤, 2007, 2009)。

大学への移行時には多様なサポートが提供されていることが指摘されている。有効なサポートの提供者は友人, 先輩, 教員, 職員, 両親と多様であることが示唆されている(東原・塚脇, 2015; 塩澤, 2008)が, 近年では特に, 学生が学生をサポートする「ピアサポート」にも注目が集まっている。ピアサポートは学生が学生という立場を生かして, 同じ立場にある学生を支援するというものである。その成果として, 社会的な適応や所属大学への適応が促されること(Hurtado, Carter, & Spuler, 1996)や, キャリアに関するピアサポートによって学生のキャリア探索が促されること(Zhang & Huang, 2018)などが報告されている。

ピアサポートの対象は必ずしも新入生に限るわけではないが, 新入生を対象とした支援策として用いられやすい傾向にある(e.g. 細川, 2008; 春日井, 2009)。くわえて, COVID-19

のまん延やロックダウンのような状況では, 学生の精神衛生の維持にピアサポートが必要であることも議論されており(Elmer, Mepham, & Stadtfeld, 2020; Sun, Lin, & Chung, 2020), 永井(2022)の報告した新入生支援の事例や, 田中・森川・石川(2022)のオンラインを利用したコミュニケーション環境の提供などはコロナ禍におけるピアサポート活動の一形態を示している。

学生によって学生をサポートするメリットには, 新入生にとって支援者が同じ立場であることが指摘されている。青年にとって同世代の友人が重要なサポート源になることが示唆されており(牧野, 2012; 和田, 1998), そのために新入生にとって身近で同じ立場の学生はサポートを求める相手として利用しやすいものと考えられる。いくら大学に教員, 職員, 学生相談室などのサポート資源があっても, それらについての知識がない大学新入生にとっては, 特にこの傾向が顕著となる可能性がある。

また, ピアサポートの成果はサポートを提供する側(以下, ピアサポーター)にももたらされる。たとえば, 能動的に考える習慣, 新しい対人関係の構築, サポートへの意欲の向上(鳥越・武・川西, 2013), アイデンティティの発達, コミュニケーションスキルの向上(田中他, 2022)などが示唆されている。また, ピアサポーターとして活動するにあたっては事前のトレーニングが実施されることが多く, その効果も検証されている(松下, 2013)。

新入生の支援に同じ立場の学生(ピア)の力を活用するという方略は前述のような効果を期待できるが, その一方で支援の運用を学生に頼ることになる。これにより, 支援体制の運営が不安定になる。そのためピアサポートの運営においては, ピアサポート活動への参加者の確保が課題の一つにあげられている(Carr, 1984)。

そこで本研究では, 学生による新入生サポートの一事例として金沢星稜大学経済学部の実施

している新入生宿泊研修（以下、宿泊研修）を紹介する⁽¹⁾。また、この研修に先輩学生としてサポーターを務めた学生へのインタビューから、サポート学生として参加した動機づけや、サポートへの意欲、サポートへの自己評価などを検討する。

2. 金沢星稜大学経済学部新入生宿泊研修

2-1. 宿泊研修の概要

金沢星稜大学経済学部では例年、4月の上旬に宿泊を伴う新入生の研修を実施している。2022年度は2022年4月6日（水）～同7日（木）に開催された⁽²⁾。

金沢星稜大学経済学部の宿泊研修の宿泊場所は石川県加賀地方に所在する温泉地である山代温泉と山中温泉を利用している。2022年度現在、金沢星稜大学経済学部には経済学科と経営学科の2学科が設置されており、経済学科の学生は山代温泉の、経営学科の学生は山中温泉

の、各旅館に宿泊して研修に参加した。

宿泊研修のスケジュールの概略を図1に示した。宿泊研修は主に以下の3つから構成される。第1に大学での学習について学ぶ全体研修、第2に1年生の必修である20名程度の初年次教育授業のクラスごとに大学での学習について理解し、履修登録を行うゼミ別研修、第3に山中温泉の市街を歩き地方温泉街における経済・経営の動向についてのフィールドワークを体験的に学ぶ街歩き研修である。このうち、全体研修以外は経済学科と経営学科で異なるタイミングで実施されている。

全体研修は経済学科と経営学科の学科ごとに、異なる教室で行われた。全体研修ではまず、経済学部長から大学での学修について説明された。大学での学習と高校までの学習の違いや各学校の制度の違い、経済学部の特徴や学習内容などについて、昨今の国際的問題や経済問題に重ねて解説された。次に、経済学科と経営

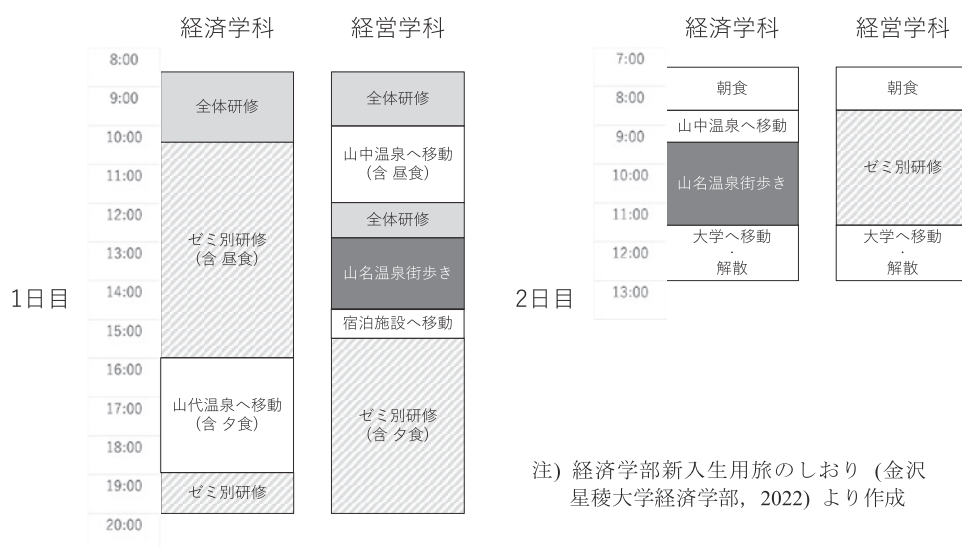


図1 宿泊研修スケジュール概略（2022年度）

- (1) 人間科学部、人文学部も宿泊研修を実施しているが、ここでは経済学部に焦点を当てて述べる。
 (2) 新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止策（バスや部屋の利用を定員の半分以上にする、換気をする等）をとりながらの実施であった。

学科それぞれの学科長により、各学科の特徴についての説明がなされた。最後に、後述する街歩き研修の舞台である山中温泉についての紹介動画を視聴した。ただし、この紹介動画は、経済学科は学部長講話の後に、経営学科は山中温泉に移動した後に視聴時間が設けられた。

ゼミ別研修では、20人前後の新入生が1つのゼミとして区切られた。1名の担当教員と、サポートを担う2、3名の先輩学生（以下、サポート学生）の指導・支援の元で履修登録を行った。履修登録に際して、担当教員から大学での学修やシラバスの読み方、授業の選択方法などが指導され、サポート学生によって履修登録やその他大学生活に関する具体的なアドバイスがなされた。

街歩き研修では山中温泉の市街を4、5名程度のグループに分かれて散策する機会が設けられた。学生には1000円分の地域通貨「やまなか湯路（やまなかゆーろ）」が配布され、本企画に参加している店舗で代理貨幣として利用できた。この研修ではやまなか湯路の利用や地域の散策を通して、街や商店の様子を観察することが学生に求められた。経済学部新入生用旅のしおり（金沢星稜大学経済学部、2022）によれば、この研修の目的として、“地域に関心を持ち、地域の経済、社会に貢献する意識を高めること”、“学生の観光行動の実態と、学生の「地域」や「観光地」に対するまなざし・イメージを把握すること”があげられている。街歩き研修を通して、経済学部学生としての自覚を促し、地域活性化・消費行動・観光行動に対するフィールドワークの体験をすることが期待されていた。

2-2. 宿泊研修におけるサポート学生の役割

前述のように、宿泊研修には各ゼミに2、3名程度のサポート学生が割り当てられた。サポート学生は各学科の2年生以上の上級生が担った。

サポート学生の役割は多岐に渡るが、新入生

の出欠管理、ゼミ別研修における教員のサポートと新入生への助言などを主に務めた。その他、サポート学生によっては、新入生の交流を円滑にするためのレクリエーションなどを企画した。

サポート学生への選抜および研修は事前に行われた。選抜については原則として2年次以降に所属するゼミや学生団体から志願者を募った。また、サポート学生には事前に当日の役割について連絡する研修が行われた。

3. 学生サポーターへのインタビュー

3-1. 目的

宿泊研修におけるサポート学生は、2年次以上の学生からの志願式であった。そのため、なぜ宿泊研修にサポート学生として参加しようとしたのか、何を期待して参加しようとしたのか、その動機づけについて明らかにすることで、新入生に対する先輩学生のサポートの意欲について理解することに繋がる。学生支援に対する先輩学生の動機づけを理解することは、新入生支援の制度運用や発展に対する知見を得ることや、ピアサポートへの動機づけを明らかにすることにも寄与できることが期待される。

そのため、本研究では著者のゼミでサポート学生を担った2名の学生にインタビュー調査を行い、宿泊研修への動機づけや、宿泊研修について各自が考えたこと、感じたことを質問する。この結果から、学生サポーターから捉えた宿泊研修の姿を報告する。

3-2. 方法

インタビュー調査にあたっては、宿泊研修にサポート学生として参加した2名の学生に協力を依頼した。当該サポート学生は著者が担当したゼミの宿泊研修に参加し、研修のサポートを担った。2名はいずれも2年生の男子学生で、1年生時に同じゼミに所属していた者同士であった。

学生サポーターへのインタビューは2022年

5月31日に、2名同時にインタビューを行うグループインタビュー形式によって行われた。インタビューには半構造化面接法を用い、主な質問は、新入生宿泊研修での新入生への自身の関わり方、新入生宿泊研修参加前の研修や学修など、新入生宿泊研修参加への動機と新入生に関わる動機、来年度の参加意欲についてであった。その他、協力者の応答に合わせてサポート学生として宿泊研修に参加した感想などを質問した。インタビューの所要時間は38分であった。インタビューは感染症対策に留意しながら対面で行った。

本調査は事前に著者の所属する機関の倫理審査を受け、その承認を得て実施された。インタビュー調査にあたっては、調査目的と以下の倫理的配慮を口頭で説明し、同意書へのサインを得た。第1に、調査への協力は任意であり、各質問に回答しないことによる不利益がないこと、第2に、調査の途中でインタビューをやめなくなった場合には、途中でやめても不利益がないこと、第3に、調査によって得た個人情報情報は厳重に管理することを伝えた。

3-3. 結果

以下にインタビューの結果を示した。インタビュー協力者の発言は斜体で示し、発言に関する著者の補足を（ ）で記述した。各発言について、発言者と発言番号を {} に示した。各発言を解釈する上で有用になるキーワードは [] 内に記した。

3-3-1. サポート学生として参加する意欲・動機

サポート学生として参加する意欲や動機づけに関して以下のような発言が得られた。

去年それこそ自分たちが行ってサポート学生にいろいろ教えてもらって立場だったときは先輩方が、すごいいろいろ真摯に、この教科の先生

はよかったよとか教えてくれたんで、それによって結構1年間しっかり単位も取れるように勉強できたりとか、あと自分CDP⁽³⁾やってるんですけど、そのCDPの内容についてもこういうのやったりするよとか教えてくれたりしたので、すごい助けになったのを覚えてて、今回もそういうふうになんか助けになれるようなサポートをできたらなと思っては、いました。{学生A-1}

この発言からは、[自身が受けたサポートの経験]がサポート学生としての参加を促すことが伺える。

また、別の理由として以下の発言が得られた。

あまりいい理由ではないんですけど、やっぱり第一に無料で行けるっていうのがあって。また、すごい楽しそうでしたし。やっぱり1年生と、去年僕らもお世話になったので、先輩に。同じようなことしてあげたらいいなっていうのも本当にちゃんとありました。{学生B-1}

学生Bの発言からは、[自身が受けたサポートの経験]に加えて、[宿泊研修自体の魅力]が関連していることが見られた。宿泊研修は温泉街で行われたが、この温泉街に公費（大学が負担）で行けるということ、研修への参加が楽しかったという経験に基づく、宿泊研修の魅力はサポート学生の参加意欲を高める可能性がある。

3-3-2. 参加にあたっての研修・準備等

本研究において、サポート学生として宿泊研修に参加するにあたり、事前の研修等がなされていたかを質問した。この質問について、以下

(3) CDP (Career Development Program) は金沢星稜大学で実施している資格試験・採用試験の対策講座である。

の一連の会話がなされた。

1) 事前に、その、(研修は) あった。

{学生A-2}

2) 前日やったっけ? {学生B-2}

3) いや、前日じゃない、前々日ぐらいじゃない?結構ギリギリだったのは覚えてるんですけど。{学生A-3}

4) 前日のやつと、あと始まる1時間ぐらい前とか。{学生B-3}

宿泊研修への参加にあたって事前研修が実施されていたようであるが、数日前の研修・説明となっており、「ギリギリ」であるとサポート学生が感じていることが示唆された。学生の応答からは時間の余裕を持って企画されていたわけではない印象を受けていることが伺える

研修の内容について、学生に聞いたところ以下の点が語られた。

どういう注意事項があるとか、先輩像みたいな。しっかりマナーも守れるし、楽しいことも教えられるような先輩像を見せてあげてほしいみたいなのは言われてたような気がしますね。{学生A-4}

なんか確か誰か遅れてきた人がいて、時間を守れないのはよくないみたいなことはおっしゃってたかな。学校側の人が。けど堅いだけじゃ(ダメ)みたいなこともおっしゃってたかな、確か。{学生A-5}

本当に。注意事項だけ言うみたいな感じでした。なんで別に集まって何しようとかいうのはあんまりなかったです。レクリエーションやろうとかいうのも別に指示されたわけじゃなくて、みんなが自主的にやってた感じやと思います。{学生B-4}

(注意事項の例について) 個人的なやり取りしちゃいかん。アドレスが、

交換しちゃ駄目みたいなのはありましたね。(他の例として) この授業はいいよ、楽やよとか、これ(ある授業)はあんまりお勧めしないよみたいな。あと1限は入れるなみたいな。{学生B-5}

宿泊研修への参加にあたって、[サポート学生の態度] や [サポート時の注意] について説明がなされたようであった。研修では注意事項やスケジュール等についての共有が中心になっており、学生はこの事前の打ち合わせに対して、以下のような感想も抱いていた。

そこらへん(サポート学生への研修やサポートへの直接的な指示がないこと)で自主性、どういうふうにしたら面白いんやろなみたいな、試しとったんかな。{学生A-6}

学生によっては、サポート学生の自覚を持ち、[サポートへの主体性] を発揮することも期待されてると受け取ることもあった。

3-3-3. サポート学生としての評価・振り返り

次に、サポート学生として自分たちのサポートへの評価に関する発言を以下にまとめた。

自分がやってもらった側のときほど自分のなかではサポートできた感じはしなかったんですけど、それでもどの教科がいいですか?って聞いてくれたりした子もいたので、その部分に関しては結構教えてあげられたのかなとは思いました。{学生A-7}

なんだろう、俺らが1年生のときには結構3年生にいっぱい写真撮ってもらった印象はあるんですけど、いろんな。それこそなんでしたっけ、2日目の山中(温泉)に行ったときに道中で見かけたら(写真を撮ってくれる)みたいな、結構あったんですけど、俺らそこまで写真撮ってあげたりとかできたかなっていうのは。{学生

A-8}

僕は、去年僕らも参加する、1年生側として参加して、やってもらってよかったなっていうことは今年大体できたかなっていう感じはしました。あとやっぱ、履修登録とか、それぞれさっき言ったCDPとか、僕らの伝えたいことっていうのは伝えられたかなと思うんですけど。{学生B-6}

サポート学生としての参加の背景には {学生A-1} のような動機づけがあり、[自身が受けたサポートの経験] が参加への意欲を促していたが、それだけでなく、サポートの評価基準にもなる。[昨年との比較] がサポート学生自身によってなされ、それにより自身のサポートが評価される。

また、自身のサポートの評価は[昨年のサポートとの比較] だけでなく、他のゼミのサポートに対しても行われたようである。

学業的な以外の面。(バイトが、とか? {学生A}) いや、その大学生らしい、楽しい、なんて言うんですかね、割とほかのゼミがみんなで1年生集まって、先輩と夜「あやとり橋」に行ってたみたいな話聞いたりして、なんかそういうのもやってあげられたらよかったなと思ったんです。だから大学生らしい楽しみ方っていうか、かっちりした感じじゃなくてそういうのも教えられたらなと、よかったなと思ってたんですけど、そういう面ではあんまりよくなかったかな、どうかな。{学生B-7}

僕らは(サポートが)できたと思うんでよかったんですけど、それこそ本当に2年3年(サポート学生)だけで楽しんでみたいなところはあったっばいんで、そういうところですかね。一年生を楽しませようよっていうスタンス

でやるっていう。{学生B-8}

以上のように、自分たちのサポートの評価は[他学生のサポートとの比較] によっても行われたことが分かる。

また、他者との比較だけではなく、自身の抱く[大学生像との比較] もされていた。

なんかもっとかっこいい姿見せれたらなって思いました。(それはどういうことですか?) 正直僕があんまり社交的じゃないんで。大学生って割と楽しそうというか、あるじゃないですか。そういう感じがよかったんかな、去年がすごい明るい人たちやったよね。あんまり顔とか覚えてないですけど3人組の女の子で、すげえなんか楽しそうにしてたんで、わあ、なんかいいなと、うらやましいなと思ってたんですけど。そういう感じでもよかったのかなみたいな。最初の、多分初めて見る先輩じゃないですか。そういうところで大学生像が決まってくるかなみたいなのがあって。ちょっと僕の変な考え方もしんですけど。お手本のような大学生っていうか、ちょっとはしゃいでるぐらいの感じのほうが、大学生活楽しそうやなって思ってくれるかなって。{学生B-9}

学生Bは自身の社交的でない性格を振り返りつつ、学生B自身が抱く「理想の大学生」的な振る舞いはできなかったと評価している。学生A自身も社交的ではないことを述べており、以下の会話をしている。ここからも新入生に対して大学生の理想的な姿を新入生に示すことを意図していたことが伺える。

1) ちょっと暗かったかもしれんな。

{学生B-10}

2) 俺ら2人がちょっと、そうやね。

{学生A-9}

3) あれでも結構無理してたほうなん

ですけど。|学生B-11|

4) 特に*** (学生B氏の名前) は結構明るめにやとった気はするけど。|学生A-10|

5) 明るめに。そうですね。いつもよりは明るめにやりましたね。|学生B-12|

6) 真面目なだけじゃ伝わらないものもありますし。|学生A-11|

また、サポートの振り返りにあたっては、[新入生への配慮] ができたかどうか自己評価の基準となっていた。たとえば以下のような発言がその例としてあげられる。

移動中に、ちょっとしたバスまでの移動とか、目的地までの移動とかのときに、何人かの子たちに話しかけたりとかしてて、というのが趣味なの? とかそういう普通の話とかしてたんですけど、もうちょっと、大学に入ってからどうか、大学に対する不安とかをもうちょっと消してあげられるような質問とかしてあげたらなとは思いましたね。|学生A-12|

1人でいる子とかって、しかもやっぱり1人だとすごい不安じゃないですか。そういう子たち中心に結構話しかけてはいたんですけど。|学生A-13|

振り返り時には1年生の参加についても言及がなされた。

思ったこと…。本当は(1年生)みんなに参加してほしかったなっていうのはありますね。多分何人か参加してなかったんで。そもそも全員参加せんのかみたいな状態やったんですよ、多分1年生が。参加必須なのかみたいな。|学生B-13|

同じく、1年生の参加について、上記 |学生B-13| の発言を契機に、以下のような一連の

会話も得られた。

1) 去年の僕らの代、部屋割りのグループのまま今も仲いいみたいな感じなので、参加はしたほうがいいのかと思います。|学生B-14|

2) ほかの部屋もほかの部屋のグループで仲良くなったりしてたので。今も結構学生ホール行くとそのメンバーでよく話してるところ見るんで、やっぱりそういう一緒に行ってみたい、絆深めるっていうのは本当に大事なんだなとは思いましたね。|学生A-14|

宿泊研修にサポート学生として参加する中で、改めて[宿泊研修の意義]について実感された。特に、以下の一連の会話にあるように、コロナ禍においては宿泊を伴う交流は重要な機会になることも指摘された。

1) いやでも(宿泊研修にサポート学生として参加して)本当に楽しかったですね。|学生B-15|

2) そうだね。なんかいろいろ1年生とかのことも知れたし。|学生A-15|

3) 最近はこの2人(学生Aと学生B)で遊べたっていうのが。あんまなかったんで。|学生B-16|

4) コロナ禍っていうのもあるから、なかなか遊びに行くっていうのができないのもあったから。|学生A-16|

以上のように、[コロナ禍における交流機会]の確保という点でも、宿泊研修が役割を果たす可能性が述べられた。

4. 考察

本研究では、金沢星稜大学経済学部が新入

生支援として実施している宿泊研修を取り上げ、その事例を紹介した。加えて、宿泊研修に参加したサポート学生にインタビューを行うことで、サポート学生の視点から宿泊研修を振り返った。

まず、サポート学生が宿泊研修に参加する上での動機づけについて質問した。この質問により、サポートする学生の確保という問題について示唆を得ることが目的である。

サポート学生の発言からは、[自身が受けたサポートの経験]、[宿泊研修自体の魅力]の2点が参加への意欲に関する回答として得られた。協力者たちは1年生の時に[自身が受けたサポートの経験]を肯定的に捉えており、その経験に基づき自分たちもサポートをしたいと考えたようである。誰かを助けるという援助行動の生起過程においては、直接援助を提供してくれた相手に対して援助を返す返礼行動が起こりやすいことが知られている(西川・高木, 1986)。しかし、同時に、被援助経験による援助行動の生起は援助者と被援助者の2者関係だけでなく、第3者に対して促されることもある。特に小野田・高橋(2016)によれば、同じ所属にいる間柄ではこれが生じやすいことが示唆されており、今回のように大学という集団の中で、先輩から受けたサポートは後輩に返すという方向の援助が促されやすかったものと考えられる。また、ごく単純に自身の経験から宿泊研修を楽しいものと認識し、[宿泊研修自体の魅力]を感じていることでもサポート学生の参加を促せるであろう。

ピアサポートが成り立つためには専門家からの支援や振り返りの機会が提供されることが必要とされてきており(Carr, 1984)、専門的な知識・知見・経験を持つ者によるスーパーバイズのもとで行われる(池・松田, 2020)ことが特徴的である。本研究で得られた発言からは[サポート学生の態度]、[サポート時の注意]といったサポート学生の心構えなどが共有され

ていた。一方で、一般的なピアサポーターへの研修でなされるような内容(e.g. 伊東, 2011; Cowie & Wallace, 2000)、たとえば、話の聞き方や受容的な態度、アイスブレイクの方法などは研修で実施されていないようであった。サポート学生の質を向上させていくことを課題とする場合、研修の充実や内容の取捨選択は今後の積極的な議論が必要となる。ただし、研修の内容は何もかもを用意すれば良いというわけでもないことも、[サポートへの主体性]を察する発言が得られたことから示唆される。ピアサポート活動への参加に対して、鳥越他(2013)では能動的に考える習慣が身につくこと、田中他(2022)では自発的な行動が自己の成長に繋がるという実感が得られることが述べられている。本研究の参加者においても、サポート学生自身が宿泊研修におけるサポートについて主体的に考えることで、これらの成長が生じるきっかけとなっていたことは十分に考えられる。

サポート学生にとって、その役割から宿泊研修を振り返る時には、[自身が受けたサポートの経験]および[昨年との比較]から、自分が受けたサポートを元に、新入生にも接することができたかという視点で語られることが多い。また、同じく他のゼミのサポート学生の様子も自己評価の手がかりになっていることが[他学生のサポートとの比較]に関する発言からも伺える。自身の援助行動の結果を成功したと肯定的に評価することは次の援助行動を促すことがこれまでも指摘されてきた(松浦, 2003)が、本研究のように組織的なサポートの場面においては、自身の行ったサポートの成否は被援助者の観察だけに留まらず、他のサポート提供者の様子や自身が同様に受けたサポートの経験も手がかりとされることが示唆された。加えて、新入生へのサポートとなるため、先輩として新入生に見せるべき[大学生像との比較]が行われ、結果[新入生への配慮]が十分にできたかどうかを振り返る様子が見られた。須崎他

(2017)によっても新入生がメンタルヘルス上の問題を抱えやすいこと、また大学生活への適応を通してこれが改善される可能性が示唆されているように、先輩学生として大学生活への適応を促すことができるとサポートはより効果的であろう。サポート学生自身も経験的にそれを理解しているのか、自身のサポートを大学生としての姿という視点や、新入生の不安を取り除いて大学に適応させるという視点から評価していることが示された。

最後に、サポート学生からは〔宿泊研修の意義〕についての語りも得られた。これは同時に〔コロナ禍における交流機会〕にも関連するところであった。サポート学生自身もコロナ禍の中で生活する大学生である。そのために、様々な不自由・制限を受けてきたことは想像に難くない。対面でのコミュニケーションに制限や抑制の働きやすい昨今だからこそ、新入生やサポート学生が宿泊研修を通して交流する意義について、今後改めて議論されていく必要があるろう。

5. まとめ

本研究は2022年度に実施された金沢星稜大

学の宿泊研修について紹介し、また宿泊研修に新入生をサポートする役割で参加した先輩学生（サポート学生）の動機づけや意欲などについて探索的に検討した。その結果、サポート学生は自分が受けたサポートの経験を肯定的に評価しており、そのために自分も次の新入生を支援したいと考えていることが示唆された。そのような意欲を持っているために、自身のサポートの内容や成否についても自分の受けたサポートなどを参考にする過程が伺えた。

今後の課題として、サポート学生の振り返りから適切な研修やサポートのフォロー体制の構築がなされる必要がある。くわえて、研究知見の蓄積として、学生によるサポートの効果やサポート学生に対する参加の意義・成果について数量的に検討していくことが求められる。

本研究はJSPS科研費(19K14387)の助成を受けた。インタビュー調査の協力を得た2名の金沢星稜大学経済学部学生（サポート学生）に心より感謝申し上げる。また、宿泊研修についての資料を提供していただいた曾我千春氏（金沢星稜大学経済学部）、金沢星稜大学事務局に感謝する。

引用（または参考）文献

- Carr, R. A. (1984). Theory and Practice of Peer Counselling. Educational and Vocational Guidance, 42, 1-10.
- Cowie, H. & Wallace, P. (2000). Peer Support in Action From Bystanding to Standing By. SAGE Publications, London
- Dolton, P. J., Makepeace, G. H., & Treble, J. G. (1994). The Youth Training Scheme and the school-to-work transition. Oxford Economic Papers, 629-657.
- Elmer, T., Mephram, K., & Stadtfeld, C. (2020). Students under lockdown: Comparisons of students' social networks and mental health before and during the COVID-19 crisis in Switzerland. Plos one, 15(7), e0236337.
- 藤井容子, 江文菁, & 西出和彦. (2013). ケアホームへの環境移行における重度重複障がい者のしつらえの変化に関する研究. 日本インテリア学会 論文報告集, 23, 47-54.
- 半澤 礼之(2007). 大学生における「学業に対するリアリティショック」尺度の作成. キャリア教育研究, 25, 15-24.
- 半澤 礼之(2009). 大学1年生における学業に対するリアリティショックとその対処. 青年心理学研究, 21, 31-51.
- 東原義明, & 塚脇涼太. (2016). 大学新入生の抑うつと自己効力感に与えるソーシャルサポートの効果—大学組織内からのサポートに注目して—. 心理相談センター紀要, (11), 13-17.
- 細川 和仁(2008). 初年次教育における学習ピアサポート活動. 秋田大学教養基礎教育研究年報, 10, 1-9.

- Hurtado, S., Carter, D. F., & Spuler, A. (1996). Latino student transition to college: Assessing difficulties and factors in successful college adjustment. *Research in higher education*, 37 (2), 135-157.
- 池 雅之・松田 優一(2020). これからピア・サポート活動を始めるにあたってのポイント 春日井敏之・増田 梨花・池 雅之(編著)ほんの森出版, 20-25.
- 伊東 孝郎(2011). ピア・サポート・スタッフ育成のための体験学習型トレーニング方法開発とその効果. *グイッソーリユーション*
- 金沢星稜大学経済学部(2022). 経済学部新入生用旅のしおり.
- 春日井敏之(2009). 大学におけるピア・サポート活動—新入生支援, インターンシップ, 授業の試み 現代のエスプリ, 502, 130-139.
- 牧野幸志(2012). 青年期におけるコミュニケーション・スキルと友人関係——同性・異性友人に対するコミュニケーション・スキルの性差, 学年差の検討——経営情報研究 (摂南大学), 20, 17-32.
- 松森直美. (2002). 短期入院を経験した小児に対する病院から家への環境移行に関する検討 手術を受けた学童への記述・描画法による調査の試み. *日本看護科学会誌*, 22(3), 39-49.
- 松下 健(2013). 大学生を対象としたピア・サポートトレーニングプログラムの効果に関する実践的研究. *ピア・サポート研究*, 10, 11-20.
- 松浦均. (2003). 援助行動経験が今後の援助行動に及ぼす影響について. *人文学部研究論集 (中部大学)*, 10, 13-27.
- 南雅則, 浅川潔司, 秋光恵子, & 西村淳. (2011). 小学生の予期不安と中学校入学後の学校適応感との関係に関する学校心理学的研究. *教育心理学研究*, 59(2), 144-154.
- 永井暁行(2022). COVID-19 の影響下におけるインターネットを活用した非対面のピア・サポート活動実践の紹介: 学生および担当職員へのインタビューより. *ピア・サポート研究*, 18, 23-36.
- 西川正之, & 高木修. (1986). 援助に対する返礼行動の研究: (1)被援助経験の有無と援助意図性の効果. *社会心理学研究*, 2 (1), 11-16.
- 小野田竜一, & 高橋伸幸.(2016). 2つの集団で構成される社会で一般交換を維持させる利他行動の特徴. *心理学研究*, 87(3), 240-250.
- Ryan, P.(2001). The school-to-work transition: a cross-national perspective. *Journal of economic literature*, 39(1), 34-92.
- 神籐貴昭, & 石村雅雄. (1999). 高等学校と大学の接続に関する研究(その1) —学生の高등학교と大学における学業についての差異の認識の観点から. *京都大学高等教育研究*, 5, 23-39.
- 塩澤聖子. (2009). 大学新入生を調査対象とした大学生用ソーシャルサポート尺度の作成. *学校メンタルヘルス*, 11, 33-42.
- Sun, Y., Lin, S. Y., & Chung, K. K. H. (2020). University students' perceived peer support and experienced depressive symptoms during the COVID-19 pandemic: The mediating role of emotional well-being. *International journal of environmental research and public health*, 17 (24), 9308.
- 須崎康臣, 杉山佳生, & 斉藤篤司. (2017). 大学新入生におけるメンタルヘルスの変化と生活習慣との関連. *健康科学 (九州大学)*, 39, 79-88.
- 田中孝治, 森川綾香, & 石川健介. (2022). コロナ禍におけるピアサポート型オンラインコミュニケーション活動の運営を担った学生の成長. *認知科学*, 29(2), 222-242.
- 鳥越ゆい子, 武佐和子, 川西千弘, & 立教大学人権. (2013). K 女子大学のピア・サポート活動における学生の成長: ピア・サポーターの成長に注目して. *帝京科学大学紀要*, 9, 45-56.
- 和田 実(1992). 大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響 *教育心理学研究*, 40, 386-393.
- 巖 爽, 石井敏, & 長澤泰.(2002). 生活環境の移行とターミナルケアの視点からみた痴呆性高齢者グループホームのあり方に関する考察. *日本建築学会計画系論文集*, 67(557), 165-171.
- Zhang, H. & Huang, H. (2018). Decision-making self-efficacy mediates the peer support-career exploration relationship. *Social Behavior & Personality*, 46, 485-498.

